

# ハインライン『未来史シリーズ ①デリラと宇宙野郎たち』のあ らすじ

takaidos

## デリラと宇宙野郎たち

---

### ①デリラと宇宙野郎たち

短編集。

<目次>

著者紹介/デーモン・ナイト

生命線

道路を止めるな

爆発のとき

月を売った男

デリラと宇宙野郎たち

#### 『生命線』

1939年。

ある博士が人の寿命、死亡日を当てる機械、方法を発明する。

科学アカデミーと生命保険会社は博士を疑い、アカデミーは検証せずに博士を追放、新聞記者は実験に応じて予言どおり死亡する。

生命保険会社は解約が相次ぎ損害を蒙り始めたため、弁護士を立てて裁判に持ち込む。

博士はアカデミーのメンバーの死亡日を自分の死亡日といっしょに封筒に入れるが、予言日どおり自宅で暗殺される。

#### 『道路を止めるな』

1940年発行。

1950年代の合衆国の、とある未来。

地上では速さの異なるベルトコンベヤー型の動路が人々運んでいた。

地下ではこの動路を動かし続ける職能組合の作業員たちがいた。

ある日、小男のヴァンが反乱を起こして、一番高速で動いている動路を停止させる。

管区の責任者ゲインズは彼を止めに向かう。

ヴァンは人事部長でもあり、作業員の適性試験を改竄して自分のように劣等感と仕事に不満のある人間を集めていたのだった。

ヴァンはいざとなれば動路を爆破するというがゲインズは武器なしで一对一の話し合いに持ち込み、ヴァンの計画を阻んだ。

労働運動を描いた作品。

非常にいい。

#### 『爆発のとき』

1940年発行。

原子力発電所を管理する研究者たちのストレスを管理する所長キングと心理学者レンツ。

物理学者のカル・ハーパーとガス・エリクソンは核エネルギーをうまく取り出してロケットの推進力に応用する方法を編み出す。

『月を売った男』

1950年。

ハインラインの力作。

誰のものでも無い月に対して、いろいろなベンチャービジネスを企むハリマン。

ロケット工学よりも、資金集めや契約、公共団体や政府からの認可、組織体制づくりなど本格的。

いっしょに開発事業をやっている2人。

ジョージ・キングストン:デロスの共同経営者。

デロス・デイビッド・ハリマン:実業家肌。DD。

ソール・ケイメンズ:デロスの会社の重役。

モンティ・モンゴメリー:デロスの会社の重役。宣伝部。

ダン・ディクソン:デロスの計画に加わる。

ジャック・エンテンサ:ダンに誘われてデロスの計画に加わる。

アンドリュー・ファーガソン:デロスの会社の技術者。アンディ。

ボブ・コスター:若いロケット技術者。

レスリー・ルクロア:エネルギー衛星往復していたシャトル・ロケットのパイロット。

カール:原子力委員会の委員長。X燃料は危険なのでロケットへの使用を禁止するとハリマンに言う。

クレム・ハガーティ:テレビ局社長。月からの放送権を欲しい。

ヴァン・デル・ヴェルデ:オランダ・ロッテルダムのだイヤモンド・シンジケート。ハリマンから月のダイヤモンド採掘権を買う予定。

<あらすじ>

ハーパー・エリクソンの技術で打ち上げられたエネルギー衛星が爆発して、エネルギー事情は1950年代に戻ってしまう。

2人は財団に赴き、月へ宇宙船を飛ばす宇宙旅行に興味があると宣言する。

ハリマン、ジョージ、ケイメンズ、モンゴメリが月の売買計画を練っているところに突然ディクソンがエンテンサを連れて現われ、共同経営を持ちかける。

ハリマンはあとをジョージとケイメンズに任せて、技術者のアンディに月へ行く多段ロケットについて研究依頼をする。

「腕のいい技術者を何よりも怒らせるのは、小切手帳を持った何も知らない阿呆が仕事のやり方

を指図することですからね」

ハリマンはコスターの月へ行くロケットの開発を依頼し、パイロットとハリマンとコスターの3人で月往復することを決める。

更にディクソンには月でウラニウム得られるので、月の裏側に原子力発電所をいくつも作ると打ち明ける。

ハリマンは月で火山活動によってダイヤモンドも生成されていると予想し、それによって得られる利益出ると考える。

ハリマンはコロラド・スプリングスのピーターソン基地でロケット開発中のコスターを訪ねる。しかしコスターは調達などの雑用に振り回されて肝心の研究が出来ていなかったため、ジョック・バークレイを呼び寄せて助ける。

さらにコスターの住居を仮名でより快適な場所に用意する。

ハリマンとディクソンは清涼飲料水のモカ・コーカの会社に行き、社長のパターソン・グリッグズに月の表面にコーカ社のロゴを打上げ花火で描いてスポンサー料を得る話もあるが、別方法で月を利用してコーカを宣伝するのはどうかと提案する。

元シャロン号のパイロットのレスリーはX燃料はまだ各国に分散されているのが残っているはずとハリマンに言う。

ハリマンは原子力委員会の委員長カールに会いに行くが、ハリマンはX燃料をロケットに使用するのは危険なので禁止と言う。

ハリマンはコロラドからのロケット・パイオニア号とサンタマリアとなるシティ・オブ・ブリスペン号二機を開発中だったが、X燃料を国外のパナマで後者に使う作戦を立てる。が、コスタリカにあったはずのX燃料はすでにイギリスに売られて使用済だった。

ルクロア、コスターから緊急電話を受けたハリマンは彼らと会うが、彼らの結論では積み込むものの重量が重過ぎて、アメリカ国内から打ち上げると切り離れた部分が国内に落下してしまうということだった。

打上げ基地をブラジルあたりに移動させること考えるが、工場の移動などに2年、資金調達宣伝活動に2年は割けない。

コロラドとアリゾナの全住民を避難させるには地上げをしなければならないが、そのための金や裁判のための期間も予想できない。

3人で行く計画を1人乗りには出来るが、3人とも最初の飛行乗りたい。

ディクソンとエンテンサは次第に不安のなり、ハリソンが心配な事をする前に少しも議決権を得ようとジョージの持つ権利を少し買おうとする。

パイオニア号の打上げはうまく行ったが、2つ予測外のことが起きた。

切手趣味のファンから請け負った、月で台紙に消印を押して来るという話が、重量計算ミスでごまかさざるを得なかった。

またハリマンは事前にルクロアにダイヤモンドを渡しておいて月で発見したという偽の報告をさせたかったが、ルクロアは袋に入れていたダイヤモンドを船内に落としてしまい、それを記者に発見されてしまった。

しかしルクロアは実際には本当の月のダイヤモンドを持ち帰っていた。

ハリマンはルクロアにその事は秘密にしておこうと言う。

ディクソンはハリマンに投資した金が返って来るのか心配で、ハリマンの各種生命保険を押さえる。

ハリマンは2号機、3号機を作り、月に作る基地に滞在する科学者も募集し、自身も今度こそ月へ行こうとするが、ディクソンとエンテンサは保険の条項を盾にそれを阻止する。

結局ハリマンはまた月へ行けなくなってしまった。

### 『デリラと宇宙野郎たち』

1949年。

男ばかりで建設中の宇宙ステーションに、女性通信士が着任した。

総責任者のタイニイは野郎どもから守るために、彼女を自分の部屋に隔離する。

しかしそのうち野郎どもが辞表を出し始める。

窮したタイニイは、おやじ(わたし?デリラ)と相談して、女性の職員も積極登用することにする。